

○135 句目「旅思排雲雁」の「雁」にこめられているものについて

孤雁 杜甫

孤雁不飲啄
飛鳴声念群
誰憐一片影
相失万重雲
望尽似猶見
哀多如更聞
野鴉無意緒
鳴噪自紛紛

（口語訳）

群れをはぐれた雁は、水も飲まず餌も食はず／飛びながら鳴いて、その声は群れを求める。／しかし幾重にも重なる雲に隔てられ、群れを見失ったこの孤独な姿をいつたい誰が憐れんでくれるだろうか。／群れが視界から消えた後も、まだ目に見えているような気がしているのだ。／あまりにも哀しいので、いつまでも群れの鳴き声が耳について離れないらしい。）

詩に描かれる群れからはぐれた孤雁は、故郷を離れ、兄弟や親戚とはぐれて漂泊する杜甫自身の投影であるう。

（松浦友久『漢詩の事典』より）。